

Kelompok 1 Koushou bungaku n shinwa

神話の世界

口承から記載へ

古代の人々は、外界に広がる自然の中に、超人間的な力のあらわれを見だし、それを神の力として恐れ敬った。それが祭りの起源であり、古代の人々は、神を祭ること、その生活の場である共同体の安定をはかろうと試みたのである。

共同体の祭りの場では、祭りの由来が説かれ、神の事績が語られた。共同体の祖先もまた神とされ、こうした祖先神の活躍は、共同体の起源の物語として語り伝えられた。祭りの場では、また地名の由来や事物の起源を伝える話も語られた。

●神話 祭りの場における、神にかかわるさまざまな語り伝えが神話である。これらの神話は史実ではなく、古代人の奔放な想像力によって生み出されたものといえる。しかし、それは単なる空想ではなく、古代人の実生活に裏づけられた一つの真実を語り伝えるものであった。

●神話の体系化 神話は、共同体が統合され、統一国家が形成される中で耳



古墳時代の武人の輪 古墳時代の武人の輪がうかがわれる。

▼神話・伝説・説話 神話は、本来、祭りの場における神にかかわる語り伝えを意味するが、伝説・説話は、それよりやや広義の概念を意味すると考えられている。

伝説は、神話に比べてより歴史的・人間的であり、説話は、信仰的な要素が失われて、話の構成そのものの中に興味を置いたもの、とする区別があるが、現実には混同して使われている。大切なのは、これらのすべてが「語りごと」として口頭による伝承をそのたてまえとしていることである。

▼語部 共同体には、神聖な「語りごと」を伝承する専門の者がいた。これを語部という。

なお、狭義には、朝廷に仕えて賜姓をうけ、儀式に際して本辞(旧辞、只次ページ語注)・伝説を語ることを職とした者を意味する。

▼太安万侶 養老七年(三三)文武・元明・元正の三天皇に仕える。博学をもつて知られ、「古事記」の撰録だけでなく、「日本書紀」の編修にも加わった。昭和五十四年(一九三九)の墓誌が発見された。



太安万侶の墓 丘陵地の茶畑で発見された。奈良市此瀬町。

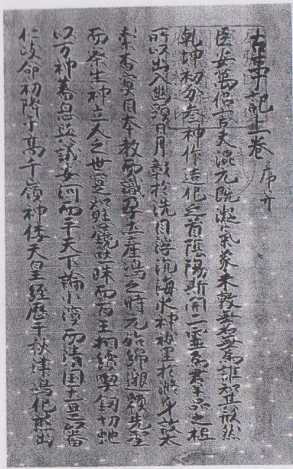
▼禰田阿礼 「古事記」序文に、聡明で暗誦が巧みであったと伝えられる以外、生没年・性別など不詳の人物。「誦み習う」とは、古伝承を「語りごと」として忠実に記憶することを意味したのである。巫女的な女性とする説もある。

▼「古事記」の研究書 江戸時代に本居宣長が著した「古事記伝」(P.132)が注目される。

語注

*壬申の乱 天智天皇の死後、その子大友皇子(1)・P.30と天智の弟大海人皇子との間で皇位継承をめぐる争いが起きた。乱の起こった六七二年が壬申の年にあたるのでこの名がある。大海人皇子(のちの天武天皇)側が勝利し、古代天皇制が確立された。*帝紀 帝王日継ともいう。皇室の系譜や皇位継承の次第を記したものである。*本辞 旧辞ともいう。皇室・諸氏族・民間に伝えられた神話・伝説など。

「古事記」序文(真福寺本)



編まれ、新たに国家の神話として体系化されていく。それらを集大成し、まとめあげたものが、「古事記」「日本書紀」および「風土記」である。

●「古事記」 太安万侶撰録。和銅五年(七三)成立。

●成立 太安万侶の序文には、次のような内容が記されている。壬申の乱に勝利した天武天皇は、当時諸氏族が持ち伝えていた帝紀や本辞を比較・検討してその誤りを正し、国家の伝承を正しく後世に伝えるため禰田阿礼に誦み習わせた。その後、和銅四年(七三)、太安万侶が元明天皇の命を受けて、阿礼の誦み習ったものを撰録し、翌五年に完成奏上したのが「古事記」である。

●内容 三巻から成る。上巻は神代の物語で、天地創造の初めから神武天皇の誕生まで、中巻は神武天皇から応神天皇まで、下巻は仁徳天皇から推古天皇までの記事を取める。

上巻は、伊邪那岐・伊邪那美二神による国土創成、天照大神を主宰神とする高天原の成立、天孫降臨などを内容とする。天孫(皇室の祖神)系神話を軸に、

出雲系神話など諸氏族の神話を組みこむ形で構成され、天孫系の後裔である皇室の支配の正統性を強調するものとなっている。

Kojiki kelompok 2

「古事記」成立の翌年、元明天皇は諸国に命じて、その国の地誌を編纂させた。地名の由来、産物、地勢、古老の伝承などを記録させたもので、こうして諸国の「風土記」ができた。現存するのは、唯一の完本である「出雲国風土記」を含めた五風土記と、後代の諸書に断片として引用された逸文のみである。

これらは、地誌としての性質上、平板な記述になっているが、中央政府による直接の編集の手を経ているだけに、諸国の神話・伝説がそのままの姿で記されており、その背景をなす地方の人々の心情や生活がうかがえて興味深い。文章はだいたい純漢文体だが、変則の漢文体、宣命書(下p.20)も使われている。

「古事記」に遅れること八年、元正天皇の命によって編集された。神代から持統天皇までの記事を載せた編年体の歴史書で、いわゆる六国史の初めである。全三十巻。神話・伝説など「古事記」と重複する内容を多く含むが、記述の態度に相違があり、史書としての性格が強くうかがわれる。

神代の巻を中心に、「二書曰」として多くの異伝を掲げており、当時存在したさまざまな記録・文書を資料としたことが知られる。時代が下るにしたがって記事が詳細となり、信頼できる史実が多く見られる。国家意識のたかまりの中で、対外的な威信をかけて編集されたもので、中国史書の影響も著しい。文章は、歌謡以外は純粋な漢文体で記されている。

「風土記」 和銅六年(七三三)編纂の命下る。

「古事記」成立の翌年、元明天皇は諸国に命じて、その国の地誌を編纂させた。地名の由来、産物、地勢、古老の伝承などを記録させたもので、こうして諸国の「風土記」ができた。現存するのは、唯一の完本である「出雲国風土記」を含めた五風土記と、後代の諸書に断片として引用された逸文のみである。

これらは、地誌としての性質上、平板な記述になっているが、中央政府による直接の編集の手を経ているだけに、諸国の神話・伝説がそのままの姿で記されており、その背景をなす地方の人々の心情や生活がうかがえて興味深い。文章はだいたい純漢文体だが、変則の漢文体、宣命書(下p.20)も使われている。

中・下巻には、神武天皇をはじめ倭建命・神功皇后・仁徳天皇・雄略天皇など英雄的人物を中心とする伝説、軽太子と衣通王の悲恋物語などが記される。中巻が神話・伝説的であるのに対し、下巻は人の世の物語としての性格が顕著になっている。

史書としての価値はさほど高くはないが、皇室を中心に諸氏族の伝承を統合し、さらに歌謡百余首を織りこんで、生き生きとした叙事的な世界が文学性豊かに描き出されている。

「表現・文体」 純粋な漢文体で記された序文以外は、漢字の音訓をまじえた変則の漢文体で記されており、語りつがれた本来の国語を忠実に伝えようとする努力がなされている。とくに歌謡や重要な語句は、万葉がな(下p.25)による一字一音式の表記によつて古意を伝える工夫がなされている。

「古事記」 上巻冒頭 天地初めて発けし時、高天の原に成れる神の名は、天之御中主神。次に高御産巢日神。次に神産巢日神。此の三柱の神は、並独神と成り坐して、身を隠したまひき。次に国稚く浮きし脂の如くして、久羅下那州多陀用幣流時、葦牙の如く萌え騰る物に因りて成れる神の名は、宇摩志阿斯訶備比古遲神。次に天之常立神。此の二柱の神も亦、独神と成り坐して、身を隠したまひき。

〔口語訳〕 天と地が初めて開けたとき、高天の原に御出現になった神の名は、天之御中主神と申し上げる。次の神は高御産巢日神。次の神は神産巢日神。この三柱の神は、みな独身の神として御出現になり、姿をお隠しになられた。次に国が若々しく、水に浮かんだ脂のようであり、くらげのように漂っているときに、葦の芽のように萌え出したものによつて御出現になった神の名は、宇摩志阿斯訶備比古遲神と申し上げる。次の神は天之常立神。この二柱の神もみな独身の神として御出現になり、姿をお隠しになられた。

参考

太安万侶の苦心
安万侶は、「古事記」序文の中で、国語によって伝えられた伝承を漢字(漢文体)で記すことの苦心を述べている。独自の文字を持たなかった日本人は、固有の伝承を書き記す際に、異質の文字言語である漢字(漢文体)を使わねばならなかった。一方、伝承の神聖さは、国語による表現の中に保たれたのであり、そこに古伝承を筆録しようとする安万侶の苦心があった。こうして採用されたのが、漢字の音訓を利用した変則の漢文体であった。

- ① 日本書紀(七二〇年) 神代・持統・統日本紀(七九七年) 文武・桓武
 - ② 日本書紀(七二〇年) 神代・持統・統日本紀(七九七年) 文武・桓武
 - ③ 日本後紀(八四〇年) 桓武・淳和
 - ④ 続日本後紀(八六九年) 仁明
 - ⑤ 日本文徳天皇実録(八七九年) 文徳
 - ⑥ 日本三代実録(九〇一年) 清和・光孝
- いづれも漢文体で記され、編年体である。

「古事記」と「日本書紀」の比較

表記	漢字の音訓をまじえた変則の漢文体	純粋の漢文体
特色	神話・伝説・歌謡を多く収め文学的	異伝を記すなど歴史書的性格が濃い
目的	皇室を中心とする国家統一を目ざす	対外的に威を示そうとする
内容	神代・推古天皇	神代・持統天皇
巻数	三巻	三十巻
編者	神田阿礼が誦習 太安万侶が撰録	舍人親王
成立	和銅五年(七三三)	養老四年(七二〇)

語注

*編年体は歴史書編纂の一つの方法で、年月の順を追って記事を配列するもの。これに対し、本紀(帝王の系譜と事績)・列伝(主要人物の伝)から成るものを紀伝体という。「史記」以下の中国正史は紀伝体を採用している。わが国の史書では、のちの「采花物語」が編年体、「大鏡」が紀伝体で記されている。(下p.53)

「常陸国風土記」 平津の駅家の西一里に岡あり。名を大櫛といふ。上古、人あり。体は極めて長大く、身は丘壘の上に居ながら、手は海浜の蟹を撈りぬ。其の食ひし貝、積りて岡と成りき。時の人、大櫛の義を取りて、今は大櫛の岡と謂ふ。(那賀郡)

〔口語訳〕 平津の駅家の西一、二里のところに岡がある。名を大櫛という。上古に人がいたが、身体はきわめて長大で、からだは小高い丘に居ながら、その手は海浜の大蛤をほじくり出して食べた。その食べた貝が積み積もって丘となった。その当時の人々は大きくの意で、今では大櫛の丘といっている。

氏族の伝承と仏教説話

律令体制が新たな制度として固定される中で、各氏族が古くから持ち伝えてきた伝承も、独自の形でまとめ上げられていく。奈良時代末期の『高橋氏文』、平安初期の『古語拾遺』は、こうした氏族の伝承を伝える貴重な記録である。この二書は、いずれも氏族間の抗争に際して、自氏の威信を示すために編集されたものであり、家の系譜や祖先以来の功業などが記されている。『日本書紀』の記述を参照する形で記されているが、氏族固有の伝承も多く含まれ、注目される。

●『日本書紀』 古来の伝説ではなく、仏教伝来(五、六世紀)後に発生した仏教説話を集めたものに『日本書紀』(正しくは『日本国現報善惡靈異記』)がある。平安初期の弘仁年間(八〇〇〜八二四)に薬師寺の僧景戒が編集したもので、奈良朝の説話が多く、主として仏教の因果応報の原理が説かれている。民衆を対象とした布教活動の中で語り伝えられた説話の集成で、当時の庶民生活が生き生きと描き出されており、平安以降の説話集の先駆けをなすものである。

祭りの文学

言霊信仰

古代の人々は、自然の中に神秘的な力の存在をみとめ、それを神として祭ることで、無秩序な自然の中に安定した位置を占めようとした。荒ぶる自然の脅威を、神を祭る行為を通じて克服しようと考えたのである。こうした神を祭る場に用いられた呪的な言葉が、呪言や呪詞である。これらは神にかかわる言葉として、神秘的な働きをもつものと信じられていた。●霊力が宿る言葉 呪言や呪詞など日常の言葉とは異なる働きをする言葉には、不思議な霊力が宿ると考えられていた。口に出して言い立てた言葉は、そのまま事実として実現され、よい言葉・美しい言葉はサキハヒ(幸)をもたらし、悪い言葉はワザハヒ(禍)をもたらしという、言くと事との同一性が信じられていたのである。こうした言葉に宿る霊力(言霊)に対する信仰を言霊信仰と呼んでいる。

祝詞

原始的な共同体社会の中から統一国家が形成されると、祭りも国家的規模で行われるようになり、その内容も、皇室の長久と国家の安泰を祈るものになっていった。祭りの言葉である呪言や呪詞も儀礼化され、洗練された文飾が施されて長大な詞章として完成された。これが祝詞である。●表現・文体 祝詞の表現は韻律がことに重んじられ、また対句や反復が多用され、荘重な印象を与えるが、反面、その形式性・類型性も著しい。表記はいわゆる宣命書である。

- ▼五風土記 出雲(鳥根県)、常陸(茨城県)、播磨(兵庫県)、豊後(大分県)、肥前(佐賀県と長崎県の一部)の五つの「風土記」が現存する。このうち成立が明らかなのは「出雲国風土記」(天平五年、三三)のみである。和銅六年の天皇の命令には、次の五つことが要求されている。
 - ① 那郷の名によい意味の漢字二字を使う。
 - ② 那内の産物の名を記す。
 - ③ 土地が肥えているかを記す。
 - ④ 山川原野の名とその由来(地名伝説)を記す。
 - ⑤ 古老の伝える旧聞異事(伝説)を記す。
- 「風土記」に記された有名な伝説には、「出雲国風土記」の国引伝説、「丹後国風土記」逸文の浦島子伝説などがある。

▼「高橋氏文」 延暦八年(天智)、高橋氏が同役の安曇氏と神事に奉仕する席次を争った際、自氏の正統性を主張する目的で朝廷に奏上した書。完本は伝わらない。

▼「古語拾遺」 斎部広成の著。大同二年(八三二)成立。朝廷の祭祀の執行をめぐって中臣氏と対立した斎部氏が、自氏の歴史を明らかにし、中臣氏と対等であることを主張した書。

語注

*律令体制(律(刑法)と令(一般法規)に基づく中央集権的国家体制。大化の改新(六四五年)から始まり、大宝律令(七〇一)、養老律令(七二〇)の制定を経て確立した。



銅鐸 祭器として使われていたらしい。

▼言霊信仰 言葉の霊力に対する信仰は古くから存在したが、それが「言霊」として意識化されたのは比較的新しく、万葉時代に入ってからである。対外的な緊張の中で、国家意識の目ざめとともに「言霊」への信仰が自覚されたのである。「万葉集」には、次のような歌がある。どちらも遣唐使派遣にかかわる歌である。

○そらみつ 大神の国は 皇神の 敬しき国 言霊の 幸はふ国と 語り継ぎ 言ひ継がひ けり (巻五・山上憶良の長歌の一部)

○敷島の日本の国は言霊の佑ふ国ぞま福くあり こそ (巻十三・柿本人麻呂歌集)

▼祝詞の種類 祝詞には「諸聞し食せと宣る」で終わるもの(宣命体)と「称竟へ奉らくと申す」で終わるもの(奏上体)がある。また、内容の上から次の三つに分けられる。

① 祭祀の際に豊穡を祈るもの(祈年の祭り) 穢れを祓い清めるもの(六月の晦の大祝)

② 諸国や氏族が天皇に奏上して国家の長久を祈るもの(特に寿詞と呼ばれる)―中臣寿詞―

祝詞「六月の晦の大祓」 高天の原に神留ります、皇親神ろき、神ろみの命もちて、八百万の神等を神集へ集へたまひ、神議り議りたまひて、「我が皇御孫の命は、豊葦原の水穂の国を、安国と平らけく知るしめせ」と事依さしまつりき。

〔口語訳〕 高天の原においてになる、皇祖神、神ろき、神ろみの命の仰せことよって、多くの神たちをお集めになり、御相談になって、「私の孫の命は、豊葦原の水穂の国（この美しい日本の国を、安らかな国として平穩に治めたまえ）」とお委ねにられた。



大祓(年中行事絵巻)

現存する祝詞は、「延喜式」に収められた二十七編と、「白記」別記に収められた一編のみである。

宣命

宣命とは、元来、天皇の命を宣べ伝えることを意味したが、平安時代に入ると、漢文体のものを詔勅、和文体のものを宣命と呼ぶようになった。即位・改元・立后・立太子など、国家大事に際して宣布されたもので、政治的意図も見いだされる。

〔表現・文体〕 表現は莊重で、祝詞に類似するが、その実用的な目的に応じた、散文化への方向も示されている。仏教など、外来思想の影響も見いだされる。表記は宣命書である。

現存のもので古いのは、「続日本紀」に収められている六十二編で、文武天皇以降のものである。

詩歌

古代歌謡

古代歌謡の起源は、共同体の祭りの場で、人々によって唱されたうたにあった。これらのうたは、神への祈りや感謝をあらわすものとして、舞踊や簡素な楽器を伴う形でくり返したわれ、また、集団的な労働や作業の能率を高める役割も果たしていた。古代の人々にとって、うたは、その信仰と生産の生活に根ざした表現にほかならなかったのである。

●歌垣・宮廷歌謡 うたは、共同体が成長し、さまざまな集団行事が営まれる中で、しだいに形式が整えられ、洗練された内容を獲得していく。それらは、歌垣などの場で、民謡として広くうたわれる一方、統一国家が形成される過程で、宮廷儀礼の中に取りこまれ、宮廷歌謡としても伝承されていった。これらの民謡や宮廷歌謡を総称して、古代歌謡と呼んでいる。

古代歌謡の多くは、『古事記』『日本書紀』に載せられており、他に、「風土記」「万葉集」「琴歌譜」などにも収められている。

記紀歌謡

『古事記』『日本書紀』に収められた古代歌謡を、とくに「記紀歌謡」と呼ぶ。『古事記』に約百十首、『日本書紀』に約百三十首が見え、両者に重出するものを除けば、約百九十首を数えることができる。

〔内容〕 これらの歌謡は、独立した民謡そのままの形ではなく、神話や伝説と結び合わされ、あるいは歌謡を中心とする物語化がなされている場合が大部分である。しかし、その内容は、祭祀・戦闘・労働・恋愛・酒宴・哀傷など多岐

▼「延喜式」 五十巻。延長五年(五七)撰上。醍醐天皇の命で編集された法令書で、律令の施行細則を定めたもの。藤原時平・忠平らの編。祝詞は巻八に祈年の祭り以下二十七編が収められている。これらの祝詞の制作年代は、大部分が奈良時代以前と考えられる。

▼「白記」 十二巻。左大臣藤原頼長の日記(二二)三〇五)五。宮中の儀式などが記されている。中臣寿詞一編を収める。

▼宣命書 祝詞および宣命は、すべて漢字で表記されているが、体言や用言の語幹は大きく書き、用言の活用語尾、助詞・助動詞を万葉がな(漢字の字音)で小さく書いている。これは誤読を避けるために考え出された書き方であり、この表記法を宣命書という。宣命書は、のちにかたじけなく上に掲げた「六月の晦の大祓」の例を示しておく。

高天原神留坐、皇親神漏岐、神漏乃命以呂、八百万神等乎、神集集賜比神議議賜呂、我皇御孫之命波、豊葦原乃水穂之国乎、安国止平久所知食止、事依奉祓。



高松塚古墳壁画

▼歌垣 古代の共同体で、春秋に時を定めて、山上や海浜の聖所に集まり、男女が歌をうたい合い、歌舞・飲食に興じた集団行事。

配偶者を求め、恋を語り合う場であったが、本来は、春の豊稔の予祝と秋の収穫の感謝とを目的とする祭事であった。東国では「姫歌」とも呼ばれた。



筑波山「筑波嶺に逢はむと」と『常陸国風土記』に見える。歌垣(姫歌)の行われた筑波山

面にわたっており、古代の人々のさまざまな生活感情を知ることができる。
「表現・歌体」 表現は、枕詞や序詞が多用され、反復や対句によって韻律美が整えられている。豊かな連想や比喩を通じて、その素朴な感情が生き生きと表現されている。歌体は、まだ定型のものは少ないが、片歌・旋頭歌・短歌・長歌など、のちに発達する歌体の原型を見ることができている。

記紀歌謡から

- ① 愛しけやし 我家の方よ 雲居立ち来も (片歌・古事記)
 - ② あめつつ 千鳥ましとと など黙ける 利目 嬢女に 直に逢はむと わが黙ける 利目 (旋頭歌・古事記)
 - ③ 八雲立つ 出雲八重垣 妻こみに 八重垣造る その八重垣を (短歌・古事記)
 - ④ 隠国の 泊瀬の山は 出で立ちの 宜しき山 走り出の 宜しき山の 隠国の 泊瀬の山は あやにうら麗し あやにうら麗 (長歌・日本書紀)
- (口語訳)
- ① なつかしいことよ。わが家の方から、雲が湧いてくるよ。
 - ② 雨鳥(あめ)・せきれい(つ)・千鳥・ほおじろ(まし)とこの目のように、あなたはなぜ入れ墨をした鋭い目なですか。あなたに親しく逢おうと思って、こうして入れ墨をした鋭い目なのです。
 - ③ (八雲立つ)枕詞 出雲の国に、八重の垣に囲まれた宮殿、妻がこもり住む宮殿を建てる。ああ、その宮殿よ。
 - ④ (隠国の)枕詞 泊瀬の山は、家から立ち出た向かいに見える美しい山。家から走り出たすぐ前に見えているみことな山である。(隠国の)泊瀬の山はたいへん美しい。ほんとうに美しい。

●**仏足石歌** 記紀歌謡に類するものに、**仏足石歌**がある。奈良薬師寺の**仏足石歌**に刻まれた歌二十一首のことで、仏の徳を礼賛するものが多い。一字一音の万葉がなで記されており、短歌形式に七音一句を加えた歌体である(仏足石歌体)。この歌体は、『古事記』や『万葉集』にも、わずかながら見えている。

仏足石歌 御足迹作る 石の響きは 天に到り 地さへ揺すれ 父母がために 諸人のために

(口語訳) 釈迦牟尼仏の足跡を刻みつける石の響きは、高く響いて天までとどき、大地をも震動させ、その功德は、天地を感動させよ。父母の追善のために、衆生の救済のために。

●**琴歌譜** また、平安中期の天元四年(元二)に書写された、和琴の譜本『琴歌譜』にも、二十一首の歌謡が万葉がなで記されている。記紀歌謡と重複するものが五首含まれており、注目される。

和歌の発達

古代歌謡の母胎であった共同体が、統一国家の形成とともに変質する中で、古代歌謡の表現も大きく変貌していく。一方、新たな国家の担い手である貴族たちを中心として、官僚組織が整備され、都市生活が営まれるようになる。集団性から切り離された個的なものへの自覚が生み出されてくる。歌謡は、そうした中で、表現の洗練を加えられ、集団内部の口誦本位のありかたを離れて、自覚的な詠む歌としての性格が著しく強められていく。短句・長句の音数がそれぞれ五音・七音に固定され、長歌・短歌・旋頭歌の歌体が定型として整備されていくのである。

●**歌集の編集** こうして個的な心情をうたう、詠む歌としての和歌が発達すると、やがて歌集の編集が行われるようになった。『万葉集』の注記によれば、『古歌集』『柿本人麻呂歌集』『笠金村歌集』『高橋虫麻呂歌集』『田辺福麻呂歌集』『類聚歌林』などの歌集が存在したことが知られるが、これらは現存しない。

23 詩 歌 こうした中で、八世紀中ごろまでの和歌を集大成したのが『万葉集』である。

Kelompok 7 Bussokuseki ka dan Kinkafu dilanjutkan dgn Waka no Hatten

▼**枕詞・序詞** 和歌の修辭法の一つで、修飾される語句に具体的なイメージを与えて声調を整えながら、その語句を導き出す働きをする語。一種の比喩表現といえる。枕詞は通常五音で、一句に限られるが、序詞は二句以上にまたがる。古代の人々は、眼前の事物・景物を比喩的にとらえ、それを通じて心情の描写を試みようとした。枕詞・序詞は、事物・景物を比喩的にとらえる一つの手法であった。比喩表現を通じて心情描写をはかるこの方法は、のちの『万葉集』の寄物陳思歌(下P.24)に受けつがれるもので、和歌表現の基本的なあり方を示す。

▼**記紀歌謡の歌体** 記紀歌謡の句の音数は、初め六音・八音など一定しないものが多いが、しだいに五音・七音に固定されていく。歌体もさまざまな形態が模索されており、一定しないが、以下のいずれかに近いものが大部分で、一種の韻律美が整えられている。

片歌	五七七。最も単純な形式。
旋頭歌	五七七、五七七。片歌二首をくり返した形式。問答歌が多く、集団性・口承性が顕著。
短歌	五七、五七、七。和歌の代表的な形式。
長歌	五七、五七、五七……七。

▼**仏足石歌** 天平勝宝五年(元二)に、文書真人智努が亡母追善のため釈迦の足跡を石に刻み、この仏足跡を礼賛する歌を彫った石碑。薬師寺境内に現存し、五七、五七、七七の音数から成る。



仏足石歌「美阿止都久留伊志乃比鼻伎波……」と見える。

▼**万葉集** 関係年表

舒明天皇即位 (第一期)	舒明天皇即位
大化の改新 (中大兄皇子 天智天皇 称制)	大化元(六四五)
近江大津宮に遷都 (第二期)	天智元(六六二)
藤原京に遷都 (第三期)	天武元(六七〇)
大宝律令の制定	大宝元(七〇二)
平城京に遷都	和銅三(七一二)
「古事記」成立	五(七一二)
「風土記」編纂の命下る	六(七一二)
「日本書紀」成立	養老四(七二〇)
山上憶良没か	天平五(七三三)
「懷風藻」成立	天平勝宝三(七五五)
「万葉集」最後の歌	天平宝字三(七五九)

『万葉集』 編者未詳(大伴家持)。八世紀後半に成立。
<成立> 『万葉集』は、現存するわが国最古の歌集で、二十巻から成り、約四千五百首の作品が収められている。その成立については不明な点が多く、編者や成立年時も明確ではない。

先にあげた『古歌集』『柿本人麻呂歌集』以下の先行歌集を資料としながら、数次の編集過程を経て成立したものと思われ、その最終段階には、大伴家持が関係していたらしい。巻によって形態や分類のしかたが一定でないことも、こうした編集過程の複雑さを示すものといえよう。こうして『万葉集』が、ほぼ現存する形に集大成されたのは、奈良朝の末ごろであったと考えられている。



歌聖、柿本人麻呂

<構成・内容> 数次の編集段階を経たことを反映して、集の組織には不統一が目につくが、基本的には、雑歌・相聞・挽歌の三大部立が認められる。また、巻によつては、表現上の分類として、正述心緒歌・寄物陳思歌・譬喩歌などの類別がある。また、四季による分類、歌体や形式による分類も見いだされる。歌体は、短歌が全体の九割以上を占めるが、他に長歌・旋頭歌などがある。これらを部立によつて分け、さらに年代や作歌の場などを基準に配列している。
<作者・詠作年代> 作者は天皇から庶民まで各階層にわたり、その地域も、

Table with 3 columns: 雑歌, 相聞, 挽歌. It details the characteristics of each category, such as '雑歌' being for public occasions and '挽歌' being for lamentation.

大和を中心に東国から九州にまで及んでいる。作品の詠作年代も、四世紀ごろから八世紀後半まで、約四百五十年にわたっている。しかし、舒明天皇(六二九)以前の作には、伝誦的な性格が著しく、実際の制作年代は明らかではない。作品の大部分は、それ以後のほぼ一世紀半の間に作られたものである。
<表記・用字> 奈良時代までは、わが国固有の文字(かな文字)は発明されなかったので、漢字によつて国語を表記する方法が考え出された。これを『万葉がな』と呼んでいる。万葉がなは、漢字を表音文字として使用するもので、その音訓が巧妙に利用されている。万葉がなは、『古事記』などにも使われたが、『万葉集』において、とくにその用法が発達したので、この名で呼ばれる。
<歌風の変遷> 『万葉集』の歌風は、その変遷によつて、四期に分けることができる。その中心となる時期は、第二期と第三期である。
〔第一期〕 舒明天皇の時代から壬申の乱(六七三)(p.15 語注)までの中央集権体制が確立される間の激動の時期。この時期の歌を、初期万葉と呼ぶ。万葉時代の夜明けにふさわしく、一方で古代歌謡の面影を残しながらも、個的な感情が力強くうたい上げられている。素朴ながらも清新で、明るくのびのびとした調べが特徴で、後代にない美しさをたたえている。歌体も、五音・七音の定型に落ち着き始めている。



天の香具山

Section titled '万葉集の歌体' (Song forms of the Manyo Shu). It lists various forms like '短歌' (senryu) and '長歌' (chaga), and includes a list of '万葉集の表記・用字' (notation and characters used in the Manyo Shu) such as '正音' (shonon) and '借音' (shikinon).

『万葉集』(西本願寺本) 巻頭の雄略天皇の歌。
「籠もよみ籠持ち 掘申もよみ掘申持ち……」。

作者は、舒明天皇・天智天皇・天武天皇・額田王など皇室歌人が中心で、中でも額田王がすぐれている。

万葉の歌人たち・その1

- ① 天皇の香具山に登りて望国したまひし時の御製歌
- 大和には 群山あれど とりよるふ 天の香具山 登り立ち 国見をすれば 国原は 煙立ち立つ 海原は 鷗立ち立つ 国そ 蜻蛉島 大和の国は

(舒明天皇・卷一)

- ② 天皇の、蒲生野に遊獵したまひし時に、額田王の作れる歌

あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや 君が袖振る (額田王・卷一)

③ 皇太子の答へませる御歌

紫のほへる妹を憎くあらば人妻ゆゑにわれ恋ひめやも (大海人皇子・卷一)

〔第二期〕 壬申の乱後、平城京遷都(七〇)に至るまでの、約四十年間の時期。

持統・文武両天皇を中心とする藤原京の全盛時代で、律令体制(▽P.18語注)が一段と整備され、宮廷が繁栄と安定とを示した時期にあたる。和歌には、力強さとともに重厚さが加わり、枕詞・序詞・対句などの表現技巧が発達し、長歌・短歌などの形式が完成した。

専門的な宮廷歌人が出現し、とくに柿本人麻呂は、その第一人者として、

雄大な構想と荘重な調べて、皇室への賛歌や皇族の死を悼む挽歌をうたいあげ、長歌の様式を完成させた。人麻呂は、一方、妻を思う歌など私的な歌にもすぐれ、『万葉集』最大の歌人とされる。作者としては、他に、旅の歌に佳作を残した高市黒人、即興の歌人長意吉麻呂などがある。

万葉の歌人たち・その2

近江の荒れたる都を過ぎし時に、柿本朝臣人麻呂の作れる歌
 玉櫛 歎火の山の 榎原の 日知の御代ゆ
 生れましし 神のことごと 樛の木 の いや
 つぎつぎに 天の下 知らしめししを 天に
 みつ 大和を置きて あをによし 奈良山を
 越え いかさまに 思ほしめせか 天離る
 夷にはあれど 石走る 淡海の国の 葉浪の
 大津の宮に 天の下 知らしめしけむ 天皇の
 の 神の尊の 大宮は 此処と聞けども 大
 殿は 此処と言へども 春草の 繁く生ひた
 る 霞立ち 春日の霧れる ももしきの 大
 宮処 見れば悲しも

反歌

ささなみの志賀の辛崎 幸くあれど大官人の船
 待ちかねつ
 ささなみの志賀の大わだ淀むとも昔の人にま
 たも逢はめやも (柿本人麻呂・卷一)

〔口語訳〕

① 大和には多くの山があるが、神の降臨する天の香具山、その頂に登り立つて国見をするに、国土には炊事の煙がしきりに立ち、海上にはかめがさかんに飛び回っている。美しい国よ、(蜻蛉島)枕詞)大和の国は。

② (あかねさす)枕詞)紫草の生えているあの御料地の野を行きながら、あなたが袖をお振りになるのを、野の番人は見ていないでしようか。

③ 紫草のように美しいあなたが憎かったら、あなたの人妻なのに(人妻であるあなたを)どうして恋いしたうことがありましょう。(②)の歌に答えたもの

〔口語訳〕

(玉櫛)枕詞)歎火の山のもとも、榎原の地に都した天皇の御代からずっとお生まれになり続けた現人神のすべてが、樛の木のように次々と天下を統治なさったのだが、その大和を後にして(あをによし)枕詞)奈良山を越え、どのような御配慮からか、都を離れた田舎ではあるが、近江の国のささなみの地の大津の宮に天下をお治めになったという天皇の、大宮はここだと聞くが、大殿はここだというが、春草がいたずらに生いしげり、霞に春の日ざしもかすんで、この大宮のあとを見ると悲しいことだ。

反歌

ささなみの志賀の辛崎は変わらず昔のままの姿であるのに、大官人を乗せた船は、いつまで待っても帰ってこない。
ささなみの志賀の大わだに、水は昔ながらにたたえられているにしても、昔の人にまた逢うことがあろうか、ありはしない。

▼『万葉集』の歌風・歌人

〔第一期〕

舒明天皇以前の歌 集の中で最も古い歌は、仁徳天皇の皇后の作、および雄略天皇の作と伝えられるもの(前ページ参照)である。このほか衣通王や聖徳太子の作などがある。これらはいずれも伝説歌としての性格が著しく、古代歌謡の面影を濃く残している。実際の制作年代は不明だが、長い伝説の過程の中で、これらの作者に仮託されていたものと思われる。

舒明天皇 推古天皇元年(五三)舒明天皇十三年(五四)。第三十四代天皇。高市岡本宮を都とした。皇后(そのの皇極)・舒明天皇との間に、天智・天武天皇が生まれた。

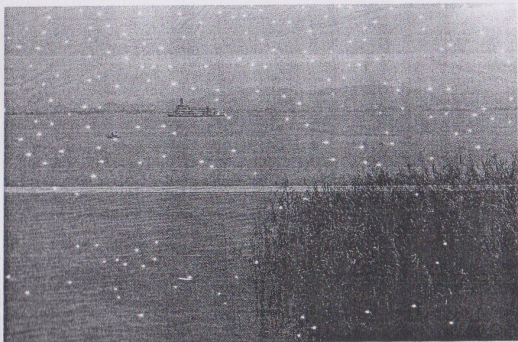
天智天皇 推古天皇三十四年(六三)天智天皇十年(七二)。第三十八代天皇。舒明天皇の皇子即位前は中大兄皇子。藤原鎌足とともに、蘇我氏を倒して大化の改革を行う。都は近江大津宮。天武天皇 舒明天皇三年(六三)朱鳥元年(六四)。第四十代天皇。舒明天皇の皇子。即位前は大海人皇子。壬申の乱(▽P.15語注)に勝利して皇室の絶対的権威を確立。律令国家体制を推進した。

額田王 生没年未詳。鏡(王)の娘。初め大海人皇子の寵愛を受け、十市皇女(大友皇子妃)を産み、天智天皇の皇后に仕えた。当代随一の女流歌人として異彩を放っている。その他 右の歌人のほか、有間皇子・倭(大后)天智天皇皇后などがある。

〔第二期〕

柿本人麻呂 生没年未詳。持統・文武両朝(六八)〇(七七)に仕えた下級官人であったらしい。序詞・枕詞などの修辭を多用し、雄大な構想、荘重な調べをもつ格調高い作品を残した。長歌様式の完成者。なお、山部赤人とともに、後世、『歌聖』と称された。編歌集に「柿本人麻呂歌集」がある。

高市黒人 生没年未詳。人麻呂と同様、持統・文武両朝に仕えた下級官人であったらしい。叙景歌にすぐれる。その他 右の歌人のほか、持統天皇・大津皇子・大伯皇女・志貴皇子・長意吉麻呂などがある。



ささなみの志賀の辛崎 近江大津宮の湖畔の唐崎。大官人たちの舟遊びでにぎわう所であった。

Kelompok 10 Manyoushu 3-4

上代

〔第三期〕 平城京遷都(七〇)から天平五年(七三三)までの約二十年間で、奈良時代前期にあたる。律令体制はいよいよ安定し、『古事記』『日本書紀』の編纂がなすとげられた。仏教・儒教・老荘思想など、大陸の思想や文化が輸入され、和歌の世界にも知的な傾向が増し、個の自覚が深められる中で、繊細・複雑な表現があらわれるようになった。皇室歌人は減ったが、作者層と歌風は多様に分化し、万葉の盛時を築きあげた。

代表歌人には、清澄な叙景歌の世界を作りあげた山部赤人、中国思想や仏教思想を学び、人生の苦悩や社会の矛盾をうたった山上憶良、脱俗的な風流の中に、人生の哀感をうたった大伴旅人、叙事的な長歌の中に、伝説を巧みにうたいあげた高橋虫麻呂などがある。



吉野宮滝の地 象山はこの近くにある

万葉の歌人たち・その3

① み吉野の象山の木の末にはこどもさ わく鳥の声かも (山部赤人・巻六)

② 子らを思へる歌 (山部赤人・巻六)

瓜食めば 子ども思はゆ 栗食めば まし て思はゆ 何処より 来たりしものそ 交に もとな懸りて 安眠し寝さぬ

反歌 銀も金も玉も何せむに勝れる宝子に及か

〔口語訳〕

① み吉野の象山のあたりの梢には、多くのさえずりあう鳥の声が響くことだ。

② 瓜を食べると子どもが思われる。栗を食べるとましてしのはれてならない。いつたい、子どもというものはどういう因縁によってやって来たものだろう。目の先にちらついている、私を安眠させない。

(反歌) 銀も金も、玉とても、何の役に立とう。すぐれた宝も子に及ぶことなどあろうか。

めいめい 大宰帥大伴卿の酒を讀むる歌

③ 験なき物を思はずは一杯の濁れる酒を飲むべくあるらし (大伴旅人・巻三)

〔山部憶良・巻五〕

ありはしない。 考えても仕方のない物思いをしないで、一杯の濁り酒を飲むのがよいらしい。



大伴家持(上置本三十六歌仙絵)

〔第四期〕 天平六年(七三四)から、集中最後の歌の作られた天平宝字三年(七五九)までの約二十年間で、奈良時代中期にあたる。爛熟した古代文化のかけで、政治的な行きづまりに対する動揺や不安が広がってきた時代である。それを反映してか、和歌は力強さを失って感傷や優雅に傾き、理知や技巧のこらされたものが多くなった。発想や表現も固定し、平安朝の歌風への推移を思わせる。長歌が衰え、日常の社交の具として短歌が盛んに詠まれるようになった。

この期の代表歌人は大伴家持で、憂愁にみちた感傷を繊細な表現でうたいあげた。

〔口語訳〕

万葉の歌人たち・その4

二十三日、興に依りて作る歌二首

春の野に霞になびきうら悲しこの夕影にうぐひす鳴くも

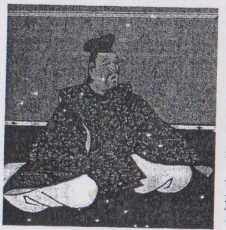
我がやどのいささ群竹吹く風の音のかそけきこの夕べかも (大伴家持・巻十九)

春の野に霞がたなびいていて、なんとなくも悲しい。この夕暮れの光の中で、折からうぐひすが鳴いていることだ。

わが家のいささやかな竹の茂みを吹く風の音の何というかすかな、この夕べであることよ。

〔第三期〕

山部赤人 生没年未詳。奈良時代前期に官廷に仕えた下級官人であつたらしい。叙景歌にすぐれ、柿本人麻呂とともに、『歌聖』と称された。



山上憶良 齊明天皇六年(六六〇)〜天平五年(七三三)? 大宝元年(七〇一)に遣唐使に加わって入唐のちに筑前守となる。漢文学の素養が豊かで、社会・人生を主題とした和歌・漢詩文が多い。集中唯一の思想歌人と評される。筑前守時代、上司の大伴旅人と親密な交際を結んだ。編歌集に『類聚歌林』がある。

大伴旅人 天智天皇四年(六八五)〜天平三年(七三二)。大納言安磨の長男で、同じ万葉歌人大伴坂之上郎女は異母妹。子に家持がいる。元明・元正・聖武の三朝に仕える。晩年、大宰帥として筑紫に下向。天平二年(七三〇)大納言に任じられて帰京、翌年没した。大宰卿時代、部下の憶良らとともに、いわゆる「筑紫歌壇」を形成した。

高橋虫麻呂 生没年未詳。作品によれば、常陸在任の長かつた下級官人と考えられる。伝説を主題とする長歌が多く、伝説歌人と称される。養老年間(七二七〜七三〇)、常陸守藤原宇合の下僚として、『常陸国風土記』の編纂に従事したとする説がある。

その他 右の歌人のほか、笠金村・大伴坂上郎女などがいる。

〔第四期〕

大伴家持 養老二年(七二〇)〜延暦四年(七五五)。旅人の子。越中守・因幡守などの地方官を歴任。延暦二年(七五三)中納言となり、同四年没。没落しつつあった大伴氏の長として、地方と中央の政界を往復し、波乱に富む人生を送った。『万葉集』巻十七から二十までは、家持の歌日記としての体裁を残している。天平五年(七三三)ころから天平宝字三年(七五九)までの作が四百数十首取められており、集中最多。『万葉集』の編者に擬せられている。

繊細で感傷的な歌風は、次代の和歌への過渡的傾向を示している。

その他 右の歌人のほか、湯原王・笠女郎・中臣宅守・狭野弟上娘などがある。

語注

*天平五年(七三三) 『第三期』をこころで区切るのは、前々年の大伴旅人の死に続き、やはりこの期の代表歌人である山上憶良の死がこの年であったと考えられているからである。*政治的な行きづまり 『藤原不比等の死』(三〇)を契機に藤原氏は朝廷における有力な地位を失っていった。その後、天然痘による藤原不比等の四人の子の病死(三三)、藤原広嗣の乱(三四)、橘奈良麻呂の変(三五)などが起こり、政界の動揺は大きかった。

『東歌と防人歌』『万葉集』の歌風は、以上のような変遷のあとを示している。しかし、『万葉集』のもう一つの側面として見のがせないのは、古代の民衆たちの歌を数多く伝えていることである。とくに東歌と防人歌は、民衆の率直な感動の心を伝えて異彩を放っている。

巻十四に収められた東歌は、東国の民謡的な歌で、方言を交じえた素朴な調で地方民衆の生活感情をうたっている。

防人歌の多くは、巻二十に、天平勝宝七年(七五五)の防人たちの歌として収められている。辺境防備のため、東国から徴発された兵士たちの歌で、肉親との別離の悲しみが胸を打つ。

万葉の歌人たち・その5

- ① 多麻川に曝す手作りさらさら何ぞこの児のここの愛しき (東歌・巻十四)
- ② 父母が頭かき撫で幸くあれといひし言葉 (防人歌・巻二十)

- (口語訳) ① 多麻(摩)川にさらす手作りの布のように、さらさらにとっしてこの子がこれほどらしいのだろう。
- ② 父母が頭をなでて、無事平穏であれよと言った言葉が忘れられない。

漢詩文

近江朝(六七三)のころから漢詩文への関心が高まり、天智天皇以下の宮廷人たちの間で、その創作が盛んになった。中国の制度を模したわが国の律令制度のあり方からしても、漢詩文の知識と創作は、律令官人にとって必須の教養であった。こうして漢詩文は、伝統の和歌に対する新文学として、公的な位置を獲得するようになっていくのである。

●漢詩文の作者

大友皇子・大津皇子・藤原宇合・石上乙麻呂・淡海三船ら

が、近江朝から藤原朝を経て、奈良朝末までに活躍した。大津皇子のように、万葉歌人を兼ねる作者も少なくない。漢詩集も編まれたが、現存するのは『懷風藻』のみである。

『懷風藻』

編者不明。天平勝宝三年(七五五)成立。

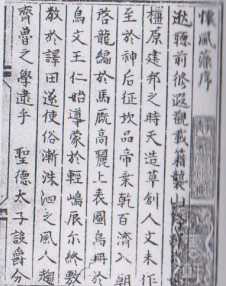
近江朝から奈良朝までの作者、六十四人の作品約百二十編を作者別に収めている。宴席や遊覧の詩が多く、中国六朝詩の風にならい、詩体は五言詩が大部分を占めている。中国詩の単なる模倣に近い作もあるが、公的な文学としての漢詩の性格をよく示している。

歌学の誕生

和歌の創作が自覚的に行われるようになってくると、それに対する批評意識も生み出されるようになってくる。すでに『万葉集』の詞書や左注の中に、そうした批評意識の萌芽を見いだすことができる。一方、漢詩文の盛行とともに、中国詩学が紹介され、その影響で、和歌に対する批評意識を理論化しようとする試みが行われるようになった。

●『歌経標式』

藤原浜成作。宝龜三年(七三三)成立。和歌の起源から説きはじめ、歌病(歌の欠点)や歌体を、例をあげて示したもの。中国詩の理論をそのままあてはめたところに無理が見られるが、和歌の本質が比喻表現にあることを的確に指摘している。和歌に対する批評意識を理論化しようとした点に意義がある。



『懷風藻』



防人(万葉集画撰)

参考 『万葉集』の影響

近世以前の和歌の世界では、中世の源実朝(金槐和歌集)らが万葉調の独自な作風を示したほかは、「古今集」が重視された。近世になると、契沖(万葉代匠記)・賀茂真淵(万葉考)らが出て、万葉研究が盛んになった。この近世の傾向は近代にまで及び(正岡子規・斎藤茂吉ら)、近代においては、万葉に帰ることによって短歌の革新がなされることになった。

- ▲大友皇子 大化四年(六四四)～天武天皇元年(六四五)。天智天皇の皇子。即位して(弘文天皇、大津宮を皇居としたが、大海人皇子(のちの天武天皇)との壬申の乱に敗れ、自害した。
- ▲大津皇子 天智天皇二年(六五三)～朱鳥元年(六五五)。天武天皇の皇子。天武天皇の死後、謀反の罪に問われ刑死した。文武にすぐれ、「万葉集」『懷風藻』に作を残す。
- ▲藤原宇合 持統天皇八年(六八四)～天平九年(七三七)。不比等の子。藤原式家の祖。「常陸国風土記」の編者にも擬せられる。
- ▲石上乙麻呂 ?～天平勝宝二年(七五二)。石上磨の子。天平十一年(七五五)土佐の国に配流。詩集に「銜悲燕」(現存しない)がある。
- ▲淡海三船 養老六年(七三三)～延暦四年(七五五)。大友皇子の曾孫。詩人・漢学者。「懷風藻」の編者ともいわれるが未詳。

語注

一まで、約三百六十年の間、建康を都とした、呉・東晋・宋・齊・梁・陳の六つの王朝の総称。江南を中心に、独自の優雅な文化が栄えた。陶淵明・謝靈運などの詩人が輩出した。*詞書・左注「詞書」は、和歌の前書き。作歌の動機やいきさつなどを記す。「左注」は、それらを和歌の後(左)に注記したものである。